

卷 頭 言

紀要工学部記念号発刊に際して

工学部長 竹内宏昌



新制東海大学工学部が設立されてから半世紀が経過した。工学部は当初清水の地にあったが、1955年に代々木校舎へ移転後、まもなく学科改組及び増設が勢力的に実施されていった。当時、欧米を廻り原子力の視察をした創設者松前重義博士は日本のエネルギー問題を考え1958年に教育用原子炉の設置を科学技術庁に申請したが、平和利用にも係わらず地域住民の理解が得られなかった。このような時期に東海大学紀要工学部は産声をあげたのである。本創刊号には、当時の情勢を受けてか、原子力工学の大家である石田正次教授によるミシガン大学の原子力核工学科の内容紹介と、原子力制御装置と運転法についての2編が掲載されている。これは、紀要工学部の使命が多くの人々に真実を伝えるための学術誌あることを実践した唯一の証である。

東海大学工学部は、やがて代々木校舎において学生を収容できなくなる程成長し、湘南校舎へ学科の移転が少しずつ進められていった。この時代、わが国は高度成長期にあり、著しいキャッチアップ型の技術革新が行われており、本学工学部は他に例のないスピードで日本一の規模にまで成長していった。この間、紀要工学部には多くの学術論文が投稿され、厳正な審査に基づいて掲載が認められた優秀な論文が続々と公表されるようになった。日頃、大きな学部であるが故に、お互いに顔を合わすことも少なく、個々の教員の研究内容など知る由もなかったが、タイムラグはあったものの、紀要の読者同士の議論や執筆者へのコメント・話題提供がもとになり、研究協力の輪が出来上がり、共同研究のきっかけをつくる等、紀要が教員の学術発展に寄与したことは周知の通りである。このように、紀要の果たした役割は想像以上のものがあつた。また、紀要は大学院生の研究者としての成長にも大きく関与した。つまり、院生に対して指導教授による手取り足取りの懇切丁寧な愛情が注がれたのとは別に、厳格な外部査読がなされ、手厳しい査読委員の質問との戦いに投稿者は直面し、社会に巣立つ研究者としての資質を身につけらるることができたのも、紀要のお陰ではなかろうか。さらに、本学もご多分に漏れず高等教育機関として学位授与の機会が多い中で、学位申請に重要な資格条件である学位論文目録に学術書として記載が認められる程にまでグレードアップされたことは学部所属教員の誇りである。

文部科学省の大学院教員制度は、教員資格獲得申請時に厳しい審査を受けるが、資格認可後、一切の調査及び審査はなく、当該教員自身の研鑽に委ねられている。東海大学では

5年前から他大学に例を見ない、大学院研究指導教員資格再審査制度を発足させ、公的審査がないが故に研究に全力投球していない教員には罰則を設けている。一方、顕著な業績を挙げた教員には更なる活躍を願い、奨励金等の支援を実施している。その輝かしい業績を人材育成に活用することは教育者の使命であるが、研究業績に対する考え方は、ここ数年、変化の兆しが現れ始めた。よりインパクトファクターの大きな学術論文誌への投稿が増え、ややもすると厳正な査読が行われているにも係わらず、紀要を軽視する者が少なくない。この現実を謙虚に受け止め、今後の紀要工学部がどのような目的で進むべきか、工学部紀要委員会(委員長青木克巳教授)において、慎重に審議していただいた。その結果、工学部の発展並びに教員の研究内容を広く公表するという本誌発足時の精神に立ち返り広報活動を展開することになった。

10学科2専攻体制の新工学部がスタートした年に、上記目標を掲げ、記念号を発刊するに至ったことは、誠に喜ばしい次第であり、紀要工学部が今後益々発展することを願う次第である。